

4. 本紙裏に本紙の肌色に染めた薄美濃紙を裏打ちした。
5. 本紙折れ目に折れ伏せを入れた。
6. 表装裂地はもとのものを再用したが、ただ一文字は色褪せた茶地金欄(後補か)であったので、萌葱地松笠文時代金欄に替え、従って風帯(旧白地透織筋銀欄)もこれにあわせた。
7. 本紙・裂地とも肌裏・増裏打ちし、仮張りした後、掛幅装に付廻しをおこなった。
8. 総裏に宇陀紙にて裏打ちし、仮張りして十分乾燥期間をおいた。
9. 軸木は新調し、軸首は元のもの(撥型木軸)を付し、発装・紐は新調して装した。
10. 養生のため桐太巻軸、桐屋郎内箱、桐漆塗台差外箱を新調し、羽二重に包んで収納した。
11. 旧杉軸木に左の墨書があり、この墨蹟の伝来を示す資料として、旧箱書とともにとりはずして、新箱の底へ保存した。
「寛永拾九年_午十一月十七日表具屋高杉七兵衛安廣作」

四、修理後

法量本紙 縦三九・九センチ 横五七・四センチ
表具 総縦一二六・一センチ 総巾六八・六センチ

(大山仁快)

3. 木造阿弥陀如来及両脇侍坐像

三軀

中尊及び右脇侍像内に建仁二年九月、願主沙弥行西、仏師僧寛慶、執筆寛範等の銘がある

指定年月日 重要文化財(昭和五十四年六月六日)
修理年度 昭和五十五・五十六年度継続
補助事業者 無量光院(愛知県稲沢市)
修理施工者 財団法人美術院
修理担当者 松永忠興

一、修理物件の概容

昭和五十二年に、奈良国立博物館によって行われた稲沢市文化財調査によって発見された半丈六の阿弥陀三尊像である。中尊及右脇侍像々内には阿弥陀三尊及五大の種子などとともに、建仁二年(二二〇二)の年記ある本格的な形式をそなえた造像銘がある。これにより、本三尊像が、本寺再興に尽した沙弥行西が大願主となり、比丘尼妙阿弥陀仏や尾張の在庁官人であろう藤原清廣、安綱等を大檀越として、仏師寛慶によって造られたことがわかる。尾張の国衙として栄えたこの地には、その歴史を反映して、現在名古屋市に移された七寺の木造阿弥陀三尊像(重文、戦災により中尊焼失)をはじめ、数多くの文化財が今に伝わっているが、その中であって、本三尊像は鎌倉初期の数少ない基準作として注目され、光背の二重円相部や台座の蓮弁など、古いものを残していることも貴重である。

二、品質、構造等

本体 各桧材 寄木造 サビ下地漆箔

中尊 頭体軀幹部は、両耳後から体側を通る線で前後に矧合わせた二材から彫成し、頸部を一旦開放し、内割りを施すが、頭部前後材の間に巾約六センチの材(両耳部分にあたる)を矧足す。左肩外側部は前膊の一部を含み、地付に至る縦一材を、また右膝奥に二材(上面及側面)を、両脚部に横木一材を矧寄せ、各内割りを施す。右手は肩、臂前、手首で矧ぎ、左前膊上面部に別材を矧足し、左手首を柄差とする。肉髻珠、白毫は各木製後補。裳先別材製後補。両脇侍 木寄せの基本はほぼ中尊と同様であるが、頭部の中間材はない。内割りは各髻部まで及んでいる。

光背 各桧材 漆箔

構造は二重円相部は縦四材、光脚部横一材を基本とする。周縁部は後補。

台座 各桧材 漆箔

中尊分の蓮肉部天板(四材矧)、蓮弁三十六枚、左脇侍分の天板、蕊、華盤(各二材矧)、蓮弁二十七枚、右脇侍分の蓮肉部(七段積重ね)の二、四、五段、上敷茄子、蕊(各一材製)、華盤(二材矧)、蓮弁二十七枚の他後補。

三、損傷状況

本体

(1) 三尊共に各矧目がゆるみあるいは離れ、両足部や地付周縁部に虫蝕朽損があった。

(2) 全体に押された後補の漆箔が浮上り、布及錆下地も接着力が失われ、剥落する部分も多かった。

(3) 中尊の肉髻珠白毫が木製後補の他後頭部右側と螺髪のいくつかが明らかに後補で、形状不適合であった。

(4) 右脇侍の髻部の三箇所及宝冠に小欠損があった。

(5) 中尊の左手第三・四指先、右手第四指先は後補、左脇侍の右手第二指から五指及左手第二指先各欠失し、右手第一指及左手第三指先が後補。右脇侍の左手第三指半ばより先及右手第五指先各欠失、右手第二・四指先後補の他、左手第四・五指が折損していた。

光背

(1) 三尊分ともに二重円相部のみ当初で、中尊分に取付けられた化仏・飛天も当初のものと思われるが、腕・天衣等が割損欠失するものがあつた。

(2) 二重円相部の各矧目はゆるみ、あるいは離れ、全体に小割損が多く、又欠失部もあつた。後補の彩色及漆箔は風化して浮上り、全体に褪色していた。

(3) 周縁部(後補)では、右脇侍分の割損欠失が甚しかった。

台座

各矧目がゆるみ、あるいは離れ、蓮弁は割損、欠失箇所も多く、

後補の漆箔が浮上っていた。両脇侍の華盤先端部が大きく欠失していた。

四、修理概要

本体

(1)三尊ともに各矧目はすべて一旦取離し、麦漆で接合緊結し、虫蝕朽損部は合成樹脂(アクリル樹脂、「パラロイドB72」15%溶液)で材質硬化を行い、漆木屎を充填して整形補修した。

(2)全身に施された後補の布貼サビ下地漆箔を全て除去した結果、一部に当初と思われる漆下地及金箔が現れた。右脇侍像の両頬部には丸味をつける為に紙スサを混えた木屎漆がかなり厚く盛られていた。これは造像当初の所為と判断されたので、除去しなかったが、このままではきわめて見苦しい為、当初の漆下地・金箔の残る部分を除いて、全体にサビ下地を施し、金箔を押し、古色仕上げとした。中尊及右脇侍像にはこうした木屎盛上げは見られなかったが、左脇侍像と同様の仕上げを行った。

(3)中尊の肉髻珠及白毫は水晶製ものを新補し、後補螺髪の状態を修正した他、三尊の後補の指先及欠失する指先を桧材で新補し、漆箔、古色仕上げとした。又、右脇侍像の小欠失部は損傷移行の恐れある部のみ補修した。

その他、右脇侍像の後補の裳先は形状不適合の為、桧材で新補した。

光背

(1)(2)二重円相部の各矧目は一旦取離し、麦漆で接合緊結した。飛天

の割損部は漆で接合し、欠損部は桧材で新補した。これら九軀の飛天は、本来、両脇侍像の光背に付属するものと考えられ、左脇侍光背周縁に五軀、右脇侍光背周縁に四軀を取付けた。但し、当初からこのような配置であったとは断定し難い。

後補の彩色及漆箔をすべて除去した結果、一部に当初と思われる漆箔が現れた。

(3)周縁部の割損欠失部はすべて補作し、後補の裏棧と、取付柄を桧材で新補し安定をはかった。その他、左脇侍分二重円相部の宝永三年(一七〇六)の修理墨書銘のある補強板も矧目を緊結し、棧を打直して取付けた。

台座

各矧目のゆるむ箇所は一旦解体して麦漆で接合緊結した。中尊の蓮肉部は解体し、天板(当初 厚さ約五・五センチ)と、右脇侍蓮肉の四段と五段に使用されていた厚約二センチの板二枚を使用し、他の後補部は撤去して桧材で新補した。また、亡失する上敷茄子、蕊、華盤、下敷茄子、受座、反花、蛤座、框二段(隅脚付)も桧材で造り、漆箔古色仕上げとした。両脇侍の華盤の欠失する先端部と亡失する下敷茄子以下も桧材で造り、漆箔古色仕上げとした。右脇侍の蓮肉部は一旦解体し、七段積重ねの二段目分(当初)を天板(上面部薄板は新補)に使用し、他の後補部は撤去し桧材で新補した。

蓮弁は後補の漆箔を除去し、割損部を麦漆で接合し、欠失部を桧材で補った。不足分(中尊三六枚、両脇侍各四五枚)は桧材で新補し、各十二方六段魚鱗葺とした。

(特記事項)

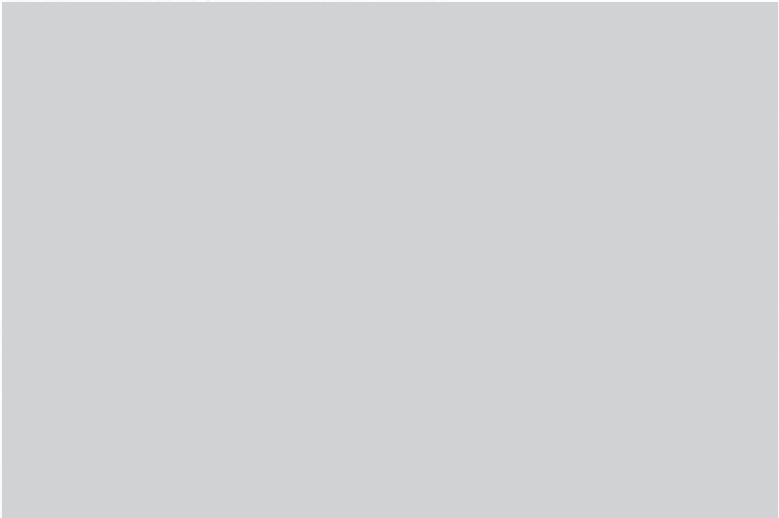
中尊像の解体により、体部背面材右側矧面に新たに「執筆覚範」

の墨書が発見された。

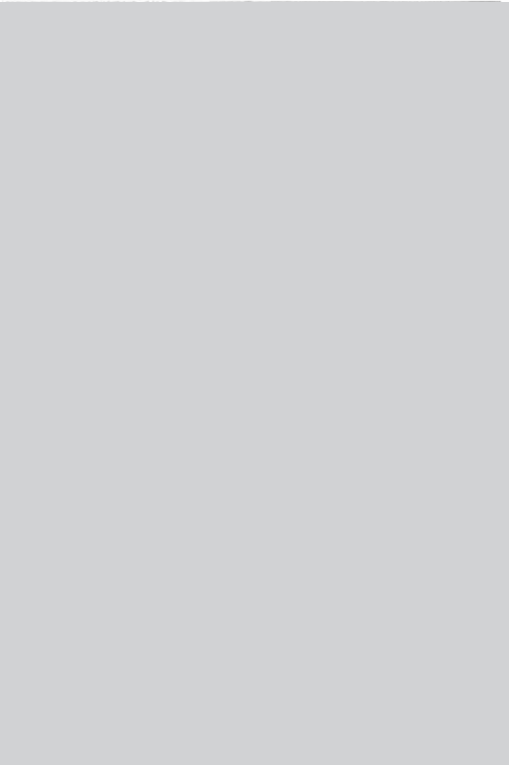
法 量 表

	中 尊	左脇侍	右脇侍
像 高	139.8cm	97.2	97.9
頂 ~ 顎	45.5	37.8	39.0
髪際~顎	25.5	16.8	17.0
面 中	26.8	16.6	16.6
耳 張	35.8	22.3	22.3
面 奥	33.7	21.4	21.3
臂 張	84.2	51.6	51.8
膝 張	115.0	69.5	69.5
膝高(左)	22.0	12.9	13.8
膝 奥	80.7	50.5	50.9
光背全高	203.5	141.5	143.0
頭光径	73.0	45.6	45.2
身光径	109.0	68.3	67.4
台座全高	109.8	71.4	70.0

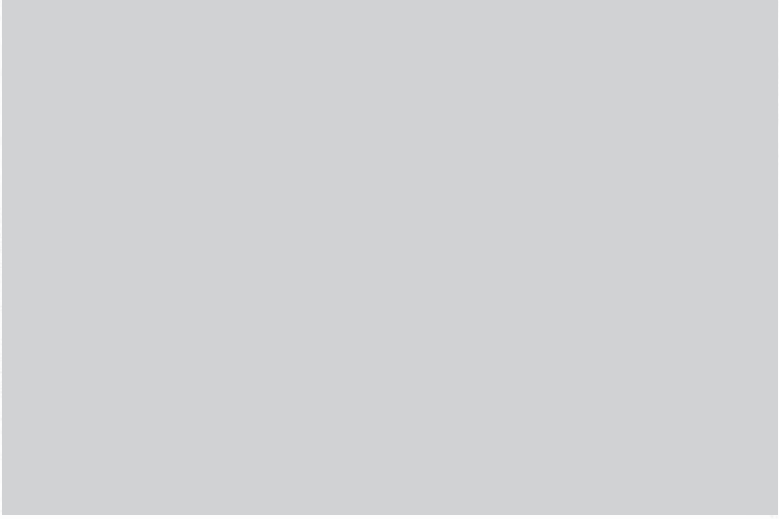
(松島
健)



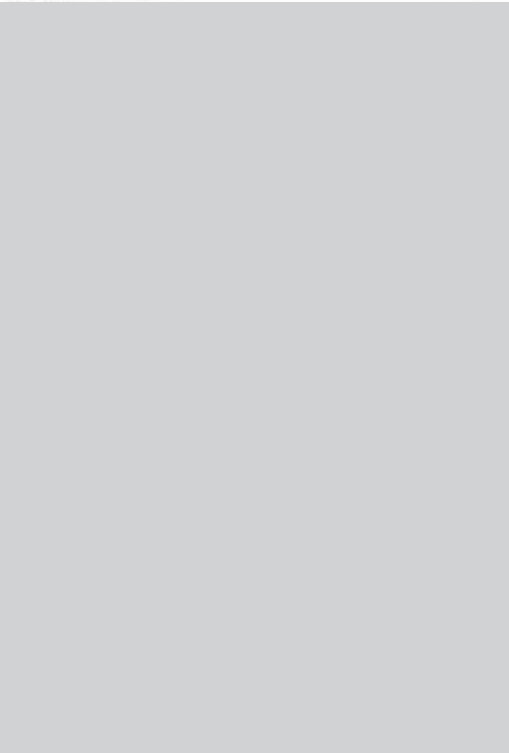
金剛界 理趣会 中央部 修理中 裏



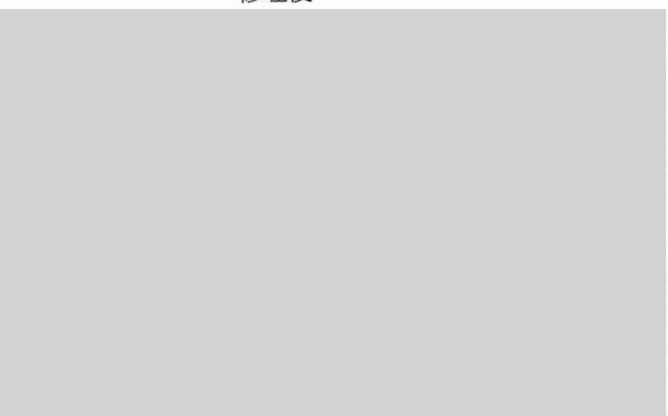
胎藏界 中台八葉院 天鼓雷音如来 修理中 裏



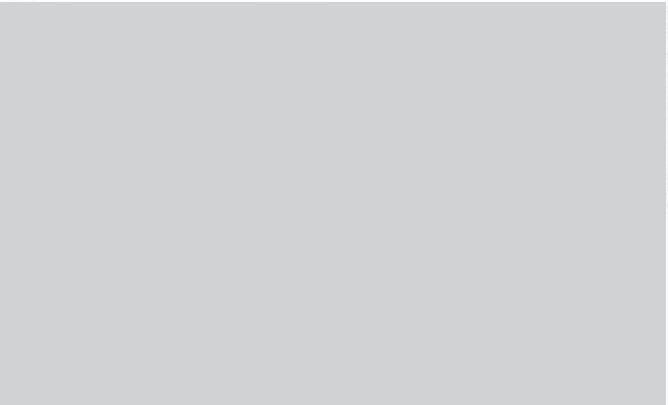
修理後



修理後

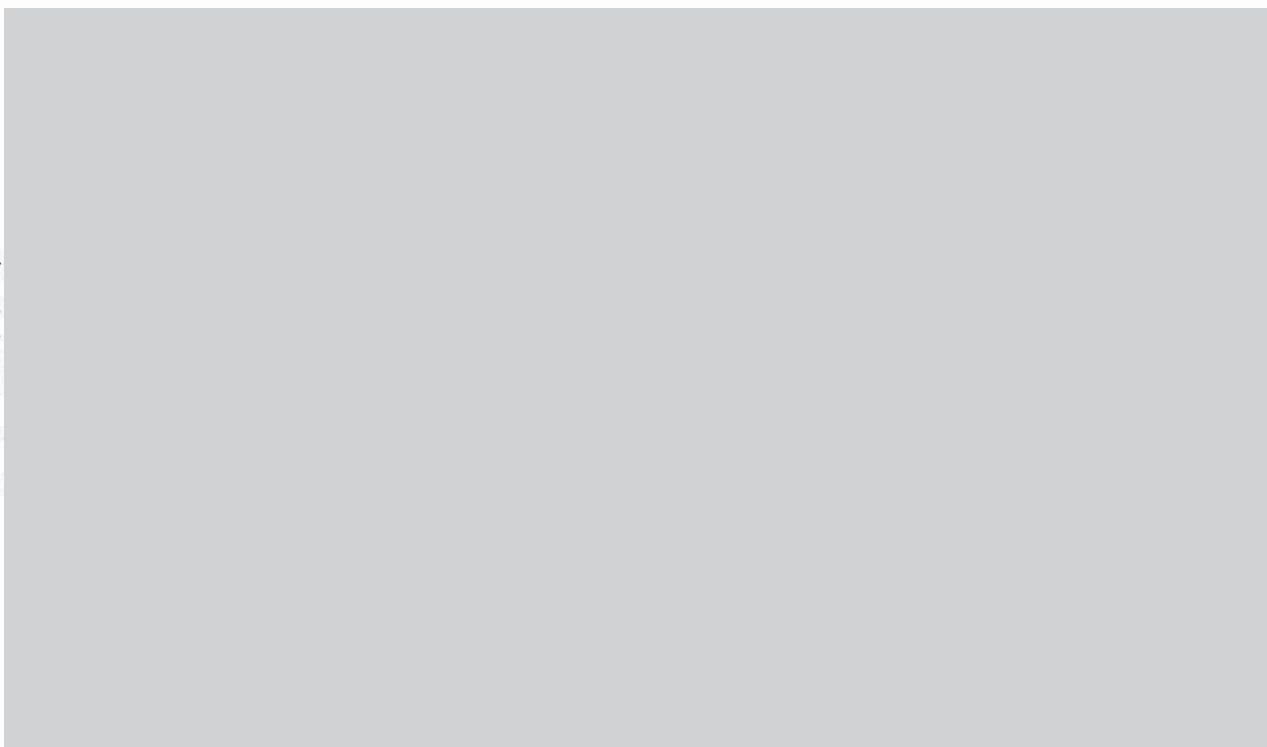


胎藏界 絹目

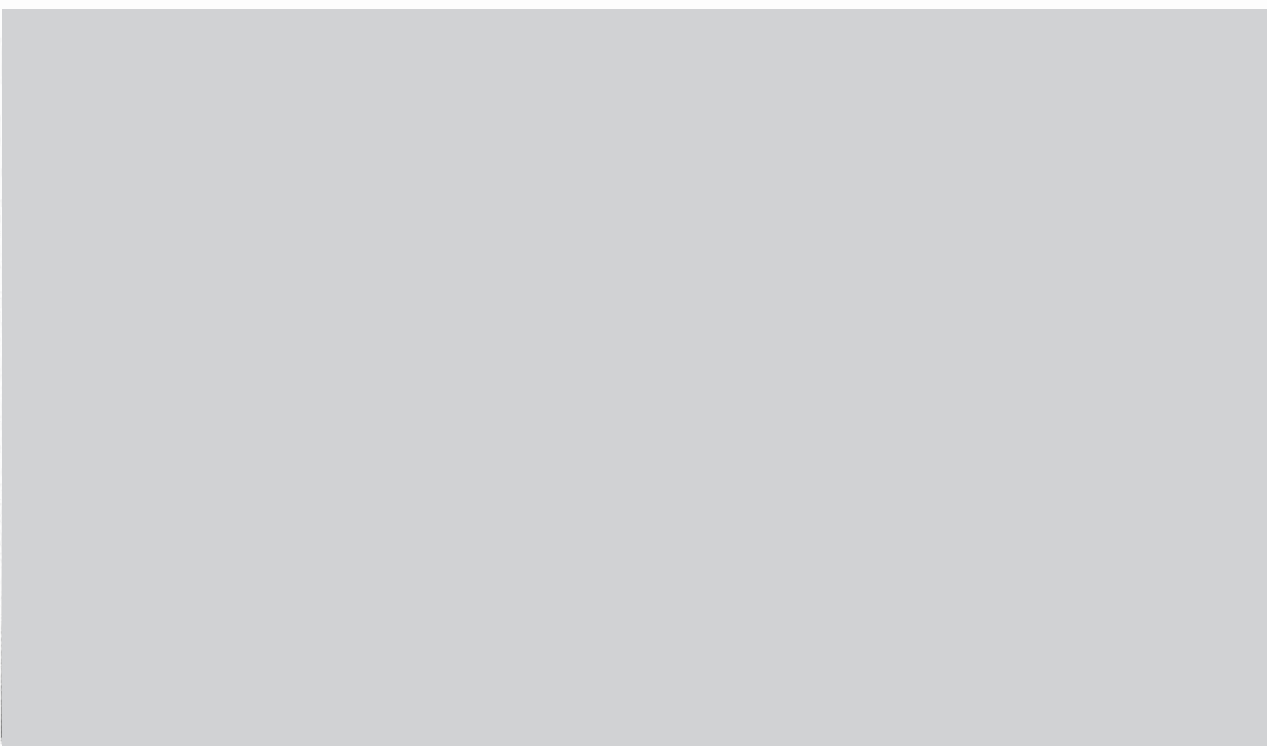


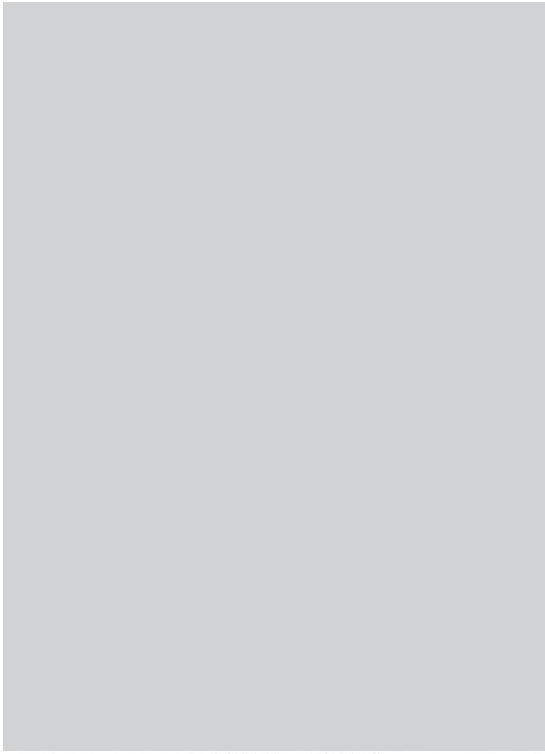
金剛界 絹目

癩刀大患墨蹟 修理前

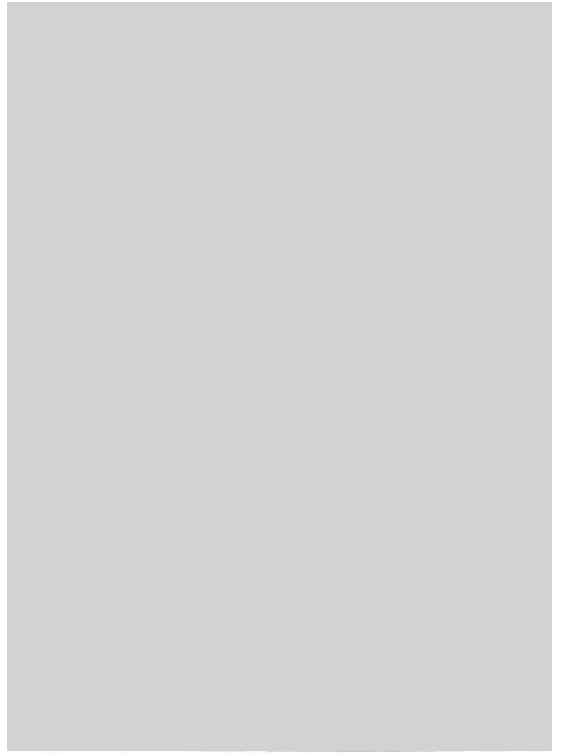


修理後

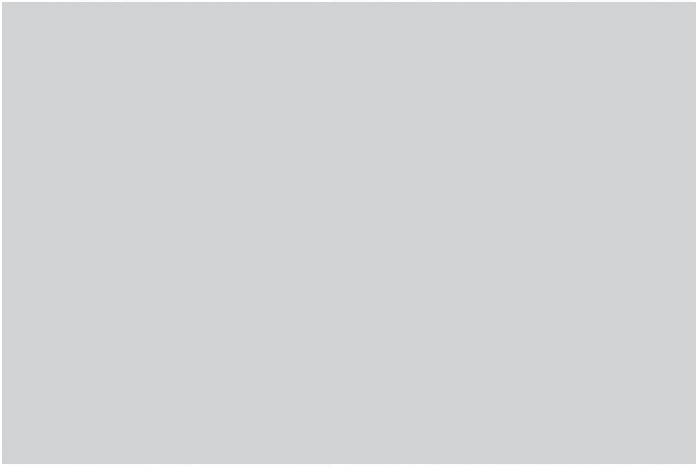




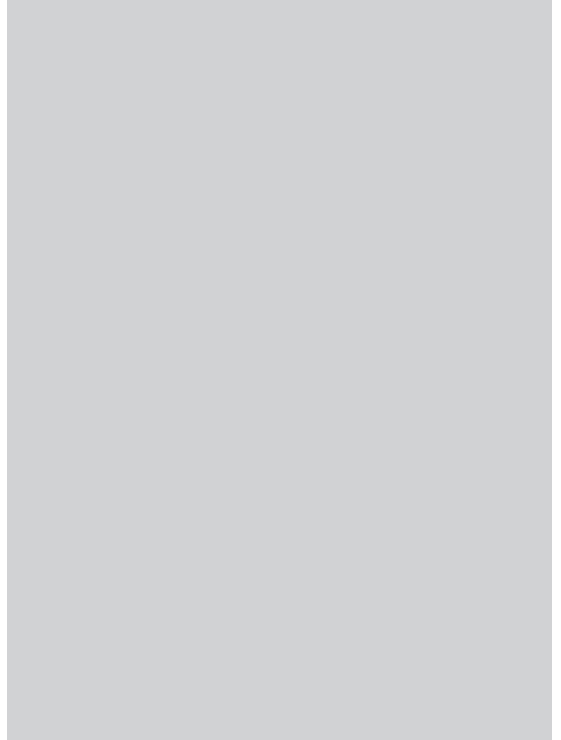
左脇侍像 修理前



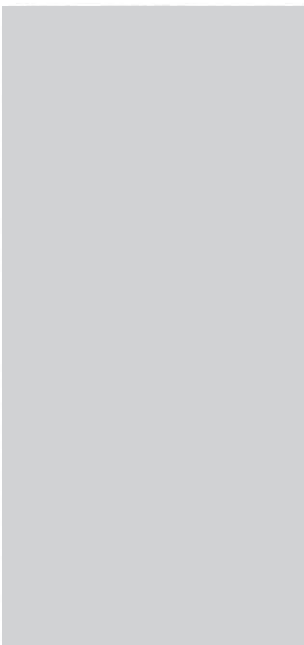
中尊像 修理前



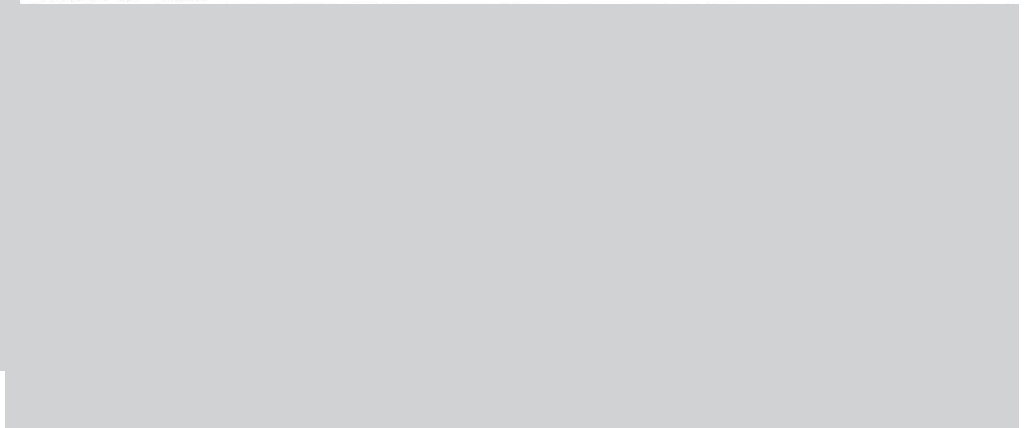
右脇侍像 解体



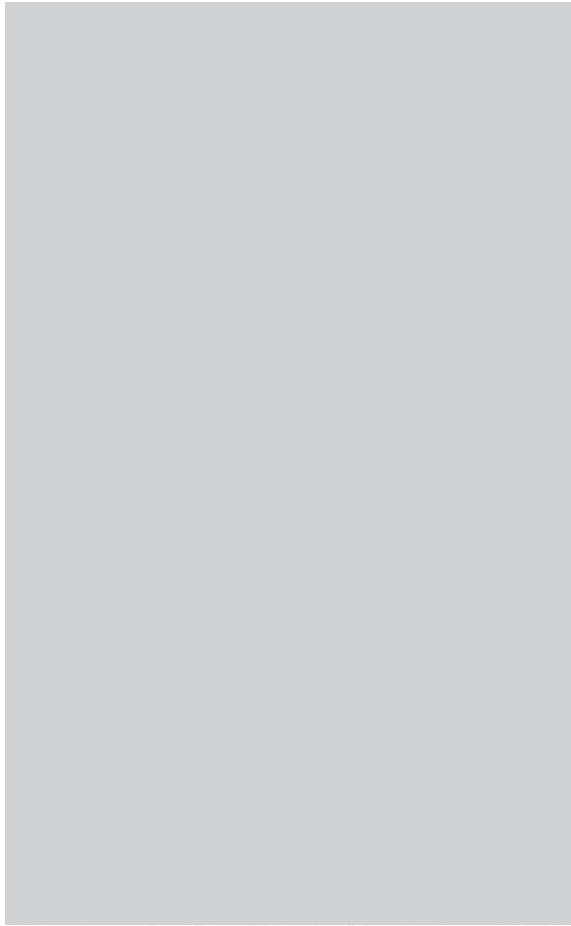
右脇侍像 修理前



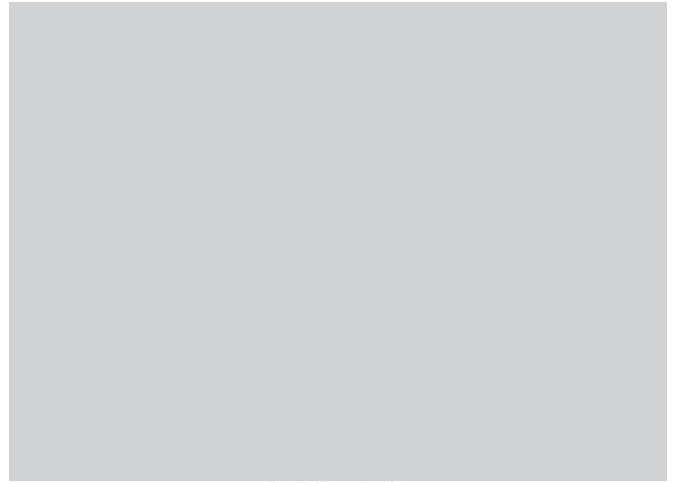
左脇侍像 頭部



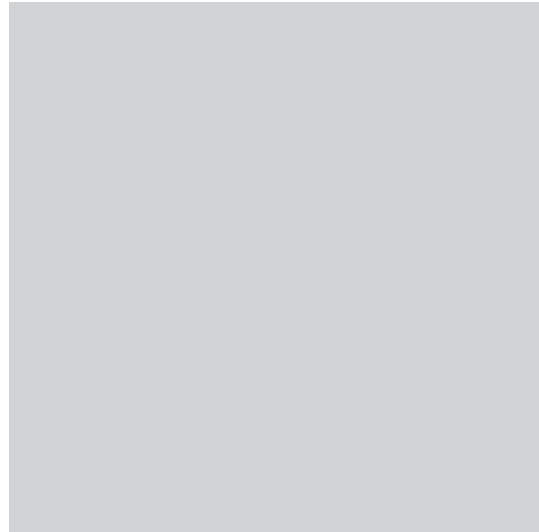
左脇侍像 解体



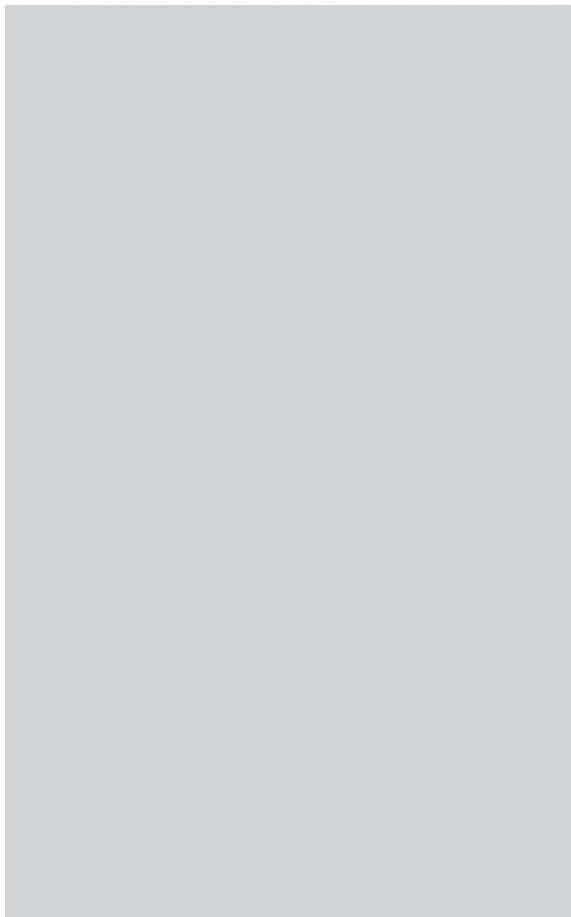
中尊像 修理後



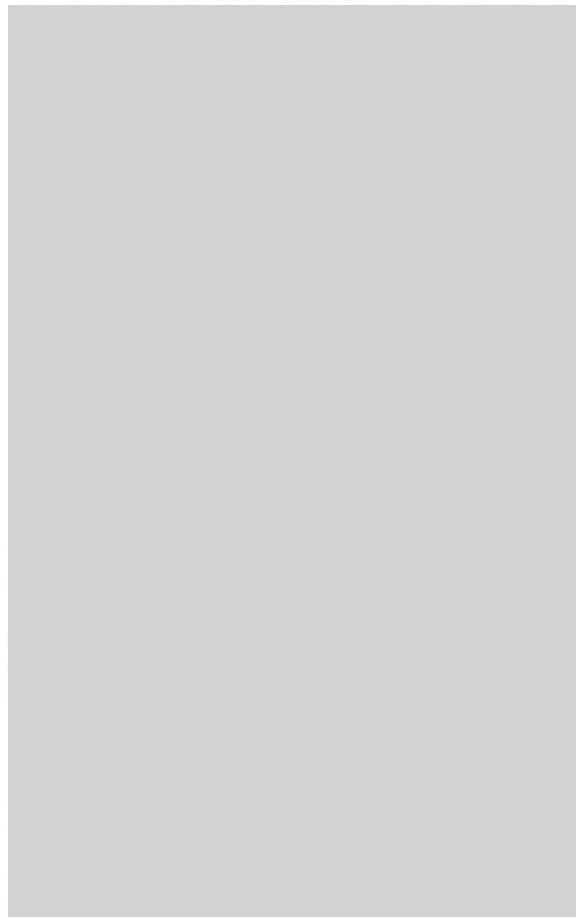
中尊像 解体



中尊像々内墨書



右脇侍像 修理後



左脇侍像 修理後